

けんらん
第四話 絢爛



—— その 目 で見届けろ ——

※留意点

三話までの救済処置が適応されず、
体力・SAN 値が0になった場合ロストとなる。

※シナリオの読み方

◇ …… 技能ロール

■ …… 公開情報

◆ …… 秘匿情報(HO 専用情報)

★ …… クリアに必要な情報(KP 側からなるべく提示すること)

▼ …… イベント/区切り

{ } …… 名称変更可能箇所(新 CCFOLIA での使用を想定)

■ KP 情報については右の灰色枠の中に記す

— 以下、シナリオ本文 —

シナリオ本編

序(マスターシーン)

ぺらり。ぺらり。本は未だ捲^{めく}られ続ける。
二人はすべての真実を知らされていく。

現実の世界がもう救いようがないこと。
自分たちにできることはないかもしれないこと。

それでも二人は抗うことをやめなかった。
だからこそ この物語は未だ続いているのだ。

ページを捲る手は未だ止まらない。
最後まで、目を離さぬよう。 どうか。

■ マスターシーン

基本的に PL・PC の RP は入らない。このシーンは PL に向けて語り掛けている。

COCシナリオ 爛爛

第四話「絢爛 - けんらん - 」

目覚め

瞼の上をゆらめく波のような光が揺蕩^{たゆた}っている。

目を開けばそこは、まるで海底のような美しい青に包まれた空間だった。

動く度あぶくが爆ぜて寄せ、そして上へと昇って行く。

呼吸は問題なくできるようだ。柔らかな砂の上に身を横たえていたようで、上半身を起こせば隣にお互いの存在を確認することができる。

周囲を見やる。

確かに海底のような場所ではあるが、砂に埋もれた家のような建造物、瓦礫がところどころ点在しており、その隙間を縫うようにたんぽぽが咲いていた。

世界の墓場のような場所だとなんとも思うかもしれない。

うず高く積み上げられた瓦礫の山によって全景を見渡すことはできない。

何より奇妙なのは頭上に広がる波間の斜光のような柔らかな光をたたえた空だった。まるで届かない海面に、ぽっかりと、1つの大きな目が浮かんでいた。

太陽のように月のようにそれはこちらをじっと見つめている。

底冷えするような真っ青な目だった。

しかしどこか優しい視線のようにも感じた。

ここに来る前に何度もみたあの大きな目なのだとなんとなく理解する。

一体誰の目なのだろうか。世界を見続ける神の目、まさしくプロビデンスの目のようにも思えた。

〈アイデア〉

どこかあの目を見ているとヴェルゼを思い出す。

彼らが自分達を見る時、あんな目をしていなかっただろうか。

〈聞き耳〉

あちこちから何かの囁くような、すすり泣くような声が聞こえる。

誰の声かはわからない。何重にも重なったように聞こえるそれは、同一の人物のものなのだろうとだけわかる。

■ 世界を構成する物

ここはヴェルゼの精神世界(核)である。この声もヴェルゼのものだ。

暫く砂の上をかき分けるように歩いていけば、やがて開けた場所に出た。

そこには数多の透明な空の棺と、その中央にすっきりと立った巨大な樹があった。樹は葉がすべて枯れ落ちた枝だけの、みすぼらしい姿をしていた。

その樹の幹に埋もれるようにして眠る人影があった。ハーゲンとエルダだ。

近寄れば二人は安らかな顔で眠っている。しかし顔色は悪く、このまま一生起きることはないのではないか？とさえ思えるだろう。

■探索箇所

- ・ 大量の棺
- ・ 樹
- ・ 砂

○大量の棺

棺はいずれも空だった……ように思えたが、そのうちのいくつかには白い花が敷き詰められている。棺に納められていた人物を弔うかのような意図を感じる。

〈生物学〉 〈博物学〉 〈知識 1/2〉

白いたんぽぽ。いわゆるシロバナタンポポだとわかる。

花言葉は「私を見つけて」「私を探して」

○樹

大樹はあの異世界で見た大樹とは異なり生命力を感じられず、死んでいるように思えた。よくよく見ると幹の間になにかが挟まっている。

それは、人間の腕だ。

驚いて更によく樹を見れば樹には幾多もの人間が埋まっている。

白い陶器のように生気のないそれは作り物のようにも思えた。幹の隙間から顔が一部見えたのは……ヴェルゼだった。

生気はなく目は見開かれたまま、どこか陶器人形のようにも思えるそれらの群れ。ここに埋まっている全ての人間のようなものは、全てヴェルゼなのだと気付く。まるで締め上げられるかのように押しつぶされるかのように彼は、彼らはそこにいた。 〈SANC 1/1D3〉

○砂

ここにも多くのたんぽぽが咲いている。ゆらゆらと黄色い花を揺らしていた。

〈生物学〉 〈博物学〉 〈知識 1/2〉

たんぽぽには「神託」「真心の愛」「離別」などの花言葉があったことを思い出す。

★ 〈アイデア〉

以前、ネルトリンゲンのリースクレーター博物館(二話)にて少年が話していた“バンスペルミア説”、そして、それを検証するための実験「たんぽぽ計画」について思い出さう。

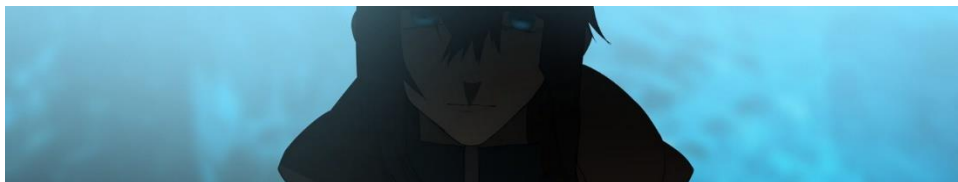
宇宙空間に乾燥した微生物などを散布し、生存できるかどうかを検証するものであり、宇宙へ飛び立つ生命の種をたんぽぽの種子に重ね合わせた命名だったはずだ。

▼ヴェルゼとの会話

暫く空間を見て回ってれば、背後に足音が聞こえる。

そこにいたのはヴェルゼだった。

だがいつもの陽気な様子はなく、こちらの様子を伺っているようで、ゆっくりと近づいてくる。



■ スチル

ヴェルゼとの再会

「驚いたな、まさかここまで来ちゃうなんて」

「ここはプロビデンスの中核。そして君たちを閉じ込めていた偽りの世界の核」

「まずは褒めてあげなくちゃね よくできました！ さすがは探索者の性ってとこかな？ 謎があれば探して^{もと}索めずにはいられないものね」

少し道化じみた動作とともにこちらに語り掛ける彼の目は鈍く光り、下手な動きをすればすぐにでも敵意を向けてくるのでは？ と思える剣呑さを含んでいた。

「さて、あまり手を煩わせないでよ。全部君たちのためなのだから」

ヴェルゼはすぐ近くの瓦礫に腰掛け話し始める。

「君たちがどこまで調べて何を知り、どこまで理解できたかはわからないけれど。ここまで来たってことは今までいた世界が作り物だってことはわかっているんだよね？ {HO1}、君は現実でシアエガと融合し今世界を憎悪と怒りのまま破壊して回っている。{HO2}、君はその混乱の最中瀕死の重傷を負って生死の境を彷徨っている。エルダ、ハーゲン、彼らも同様だ」

「僕もここまで大掛かりなものになるとは思ってなかったんだよ。{HO1}、君の精神を一時的に隔離してシアエガの汚染から遠ざけようと思ったのだけれど、神様と融合してしまったからかな、力余って世界中の人間の魂を呼び込んで1個のドリームランドを作ってしまった」

「ドリームランドというものは地球の夢見る人すべての心によって存在を得る。であればすべての人間の記憶と経験から形成されたあの世界は夢の世界？いいやもう1つの現実と言っても過言ではないだろう」

「現実も夢も大した違いはない。胡蝶か人間の目が見ているかの違いだけだ。この世界を形作るのは認識だからね。屁理屈かな？まあ聞いてよ」

「さてここからが問題だ。結論から言うよ、もうこの世界は救いようがない！」

「旧き神々はとうの昔に僕らを見放した。人の身だけで神々に挑むことなど無理だ。シアエガは絶え間なく膨張し続けている。このままいけば外なる神に目をつけられて地球ごと破壊しつくされるだろう。そしてこの世界線の地球は終わりを迎える。人類終焉シナリオにはよくある話さ。地球1つ滅びたところで世界線の1つの人類が終わったところで神々にとっては大した話じゃあない。どこかの宇宙の、あるいは世界線の地球は存続しているのだからね」

「それなら人類終焉の直前まで何も知らず偽りの安寧の中で生きたほうがよっぽど有用だとは思わない？」

ヴェルゼはまるで軽口でもいうように語る。しかし、その表情はどこまでも真剣だ。そしてどこか不安そうに青い瞳が揺れている。

「それにさ、現実かどうかってそれは本当に大事？そもそも君たちは……僕も含めて、現実で起こっていることなど忘れてあの世界をいつも通りの現実だって日常だって思って生きていたじゃないか」

「それは何も間違っていないさ。何故なら僕らは世界の成り立ちなど本来知る由もないのだから。ゲームの中の存在が自分たちを構成するプログラムコードを知ることはあるかな？人間だって自分たちの体を構成する細胞あるいは世界を構成する分子を気に掛けることはある？それらが別の組成に代わっていたとして気に掛ける必要はある？」

「答えはノーだ。僕らは世界がそう在るという結論を受け入れることしかできない」

「僕らはいつだって何かを結論付けられて生まれて生きることしかできないんだよ。僕らは誰も自分で生まれを選ぶこともどう生きてどう死ぬかさえ1人で決めることはできない」

「賽子さいこの音が聞こえる？そう、僕らの人生ってきっと賽子さいこを振るみたいに簡単に決められて、そして簡単に終わりにされてしまうんだ」

「いつか見放されて、忘れ去られる。それなら、誰の手も届かない場所に居ようよ。ここで何も知らず、世界が終わってしまうまで幸せに生きていようよ、それではいけないの？」

「僕らはこんなことのために生まれたわけじゃない」

「僕は 僕は大事な人に幸せになってほしいだけなんだよ……」

ヴェルゼは膝を抱えて 蹲うずくまる。

まるでおびえているようにも怒りに震えているようにも、泣いているようにも見えた。

「それでも君たちはこの世界を拒絶するんだね」

彼は顔をあげる。その目からは涙が流れていた。しかし柔らかく笑っていた。

■ ヴェルゼの意志

少しの会話をすることはできる。ただしここに来た時点で彼の誘いに乗ることは不可である。彼自身、心の奥底では探索者があらがうことを望んでいるためだ。

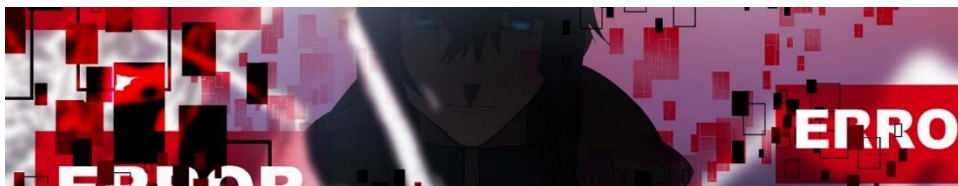
VS.ヴェルゼ

話し終えれば、ヴェルゼはすくりと立ち上がり、まるで探索者の前に立ちふさがるかのように位置取った。その表情にはすでに迷いは無かった。

「それなら乗り越えるといい、探索者」

「かりそめの世界を打ち砕いてみせろ」

ヴェルゼの姿が徐々に変容していく。体がまるで糸がほどけるように分解され光の粒子となって宙へ舞う。周囲にあったたんぽぽたちは、その可憐な黄色の花びらを一齐に綿毛に変えていく。風もないのにそれらは光の粒子とともに中空に集まっていく。0 と 1、そして数多の数式の群れがそれらを包んだかと思えば、上空に開いていた巨大な目に吸い込まれた。



■ スチル

ヴェルゼとの戦闘

そして「それ」は、まるで水面からとろりと溶けるようにしてこちらへと落下した。

巨大な眼球は目の前までやってくると、あちこちから白い触手を生やして自身を覆っていく。まるであの悍ましい神を模倣したかのような姿へと変貌していく。

世界の真意、仮初の神 「ヴェルゼ」を見た探索者は [〈SANC 1D6/1D20〉](#)

△世界の真意、仮初の神「ヴェルゼ」

STR : 40 CON : 60 SIZ : 100 DEX : 14 POW : 20 INT : 20 耐久力 : 80

〈触肢〉 50% ダメージ : 2d3 全体攻撃

〈精神汚染〉 50% ダメージ : SAN -1d3

〈咆哮〉 50% 1 ラウンドスタン(行動不可)

〈回避〉 なし

備考 : 通常の物理攻撃を一切受け付けない。

HO2 の「ララバイ」無効

■特殊戦闘ルール

模倣しただけとはいえ神に戦いを挑むのは人の身ではあまりにも無謀だ。

何か他の手立てを考えなくてははいけない。戦闘ラウンドを消費して〈アイデア〉を振ることでなにかに気付けるかもしれない。

〈リアルアイデア〉(PL 自身のアイデアや提案)が成功した場合は〈アイデア〉なしでそれを履行することも可能。

◆HO1 〈アイデア〉情報

リンが託してくれたプログラムコードのことを思い出す。プロビデンスを介した干渉なら、いくらこの世界をつかさどっている彼であっても対抗しがたいのではないかと思いつく。使うまでこれの効果はわからないままだが。

◆HO2 〈アイデア〉情報

かつてヴェルゼが人間であったときに歌った歌を思い出す。

「エルダの子守歌」……あれを使えばヴェルゼの心の奥深くに干渉し、妨害することができるのではないかと考えつく。

上記〈アイデア〉および〈リアルアイデア〉に成功した場合、下記能力を得る。

■HO1：能力追加 《ノートゥング》

判定：任意の〈芸術〉 コスト：なし ダメージ：2d10

電子の剣を生成し、この世界を構築しているプログラムを破壊する。

自らの意思、そして今までプロビデンスを受け継いできた者たちの明日を生きる希望、運命に抗う勇気がもたらした力。

絶望に抗い続ける英雄にのみ握ることを許された力だ。

■HO2：能力追加 《エルダの子守歌》

判定：〈芸術(歌唱)〉 コスト：なし ダメージ：2d10

電子の海さえ揺るがず歌声の奇跡によって、この世界を構築しているプログラムを破壊する。

かつて邪な神々を揺り起こすためのその歌声は今、人のために在る。

何よりも優しく慈愛に満ちた世界への愛の歌である。

戦闘終了

ヴェルゼ、だったものは、少しずつその形を崩壊させていく。

瞳の輝きは失せ、灰のように崩れていく。

だが苦し気な様子はなかった。どこか諦めたような乾いた笑い声が漏れる。

「はは、やっぱり 勝てないかあ」

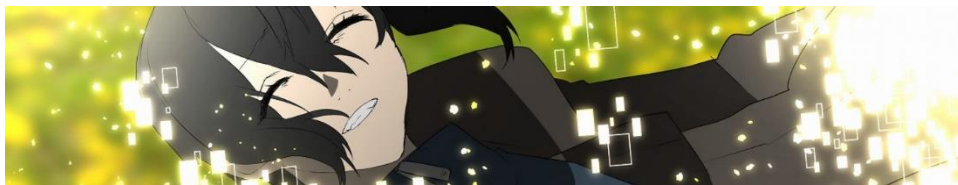
「…あのね、少しの間だったけれど一緒に過ごすことができて、よかった」

「夢はいつかさめるから夢なんだね」

触手がぼとぼと落ちていく。巨大な眼球はごとりと砂の上についに落ちた。

徐々にそれは溶けだし、中からヴェルゼが吐き出される。しかしその体もすでに崩壊を迎えつつあった。

それでも彼は笑っていた。



■ スチル

ヴェルゼ戦終了

「命が弱さを許さなくとも。それでも人は生きようと藻掻く。そして命はつながっていく。誰かの明日への希望や、誰かの愛しい願いが、歴史を、命を紡いできた。僕はそんな人類が大好きだった、僕のもとになった、人間だった僕も……」

「……さあ、お行き 偽りの時間は終わった。あとは 君たちの物語だ」

彼の体はついに、見えない風に攫われる。まるでたんぽぽの綿毛のように。

……そこに、二枚の花びらが合流する。まるで寄り添うようにそれらは中空を揺蕩っていた。

それを見つめている最中、急に大きな地響きが地面を揺らした。

地面は割れ、頭上に揺蕩っていた水面が落ちてくる。

水流と揺れに翻弄される中、誰かがあなたがたの手をとって、どこかへと投げ出した。

〈目星〉

それはヴェルゼだった。彼は微笑むと、水泡となって消える。

投げ出されたのはまばゆい光の最中。

あなたがたはその瞬間、意識を失った。

世界の崩壊

■ 世界の崩壊

ここからの描写は HO1、HO2 それぞれ「公開」で個別に行う。
それぞれが見える場所に居るためだ。

▼HO1

そしてあなたの目は見開かれる。

黒々とした雲が渦巻いている。周囲は怒号、悲鳴、^{あびきょうかん}阿鼻叫喚の狂乱の最中。

傍に居た人間はあなたを見て ^{おのの} 慄いたように後ずさりをする。

口を開く。叫び声なのか、罵倒なのか、それを知る術はなかった。

その喉が発したのは金切り声でも怒声でもない。

ただただ露出した喉笛から漏れ出るひゅうひゅうという空気の抜ける間抜けな音だけだ。まばたきののちに、それはあなたの目の前で絶命した。

周囲を見る。小さな町……だったのだろう。

もはや燃え盛る炎に抱かれたそれは見る影も残していない。

真っ黒な、焼け焦げた人間のようなものがあちこちに転がっている。

それだけではない。少し先には崖が広がっていた。その先は見えないほどの巨大な崖だ。地面が大きく抉れ、そして欠けたのだとわかる。

今地球は一体どんな形をしているのだろうか。

いつかに見た夢の光景だ。

否、あれは夢のなかに垣間見た現の光景なのだと悟る。

ふと、自身の体を見下ろす。周囲には黒々とした触手がうねり、あなたを飲み込めんと絡みついている。体の感覚はほぼ溶け落ちていた。すでに触手にうずもれた下半身がどうなっているのかなど想像もつかない。

触手の合間から緑色の奇妙な光が漏れている。そちらを見れば巨大な目が、ぎょろりとせわしくあちこち向いては獲物を捕らえそして押しつぶしている。あなたは間違いないくこの強大で邪悪な神の一部となっているのだ。

〈SANC 1D3/1D10〉

意識は朦朧としている。混濁している。明滅している。

今あなたのなかには、あなた自身ともう1つ、この邪で残虐な神の妄執、憎悪と嫌悪そして怒り、快楽が押し寄せている。

少しでも気を抜けばこの神にすべてを食いつぶされてしまうような、そんな気さえる。

否、元は同じものだったのだ。きっと恐らくはそれに抗おうとすること自体が無謀で無意味なことなのかもしれない。

それでもあなたの命はそれを許さなかった。

あなたの左目と背中に刻まれた旧き印が、もはや薄皮でつながったあなたの意識を留めている。

負けるな 抗えと、あなたの意識は叫んでいる。

▼HO2

そしてあなたは目を疑う。

あなたは地に伏せ、体中は軋み動くこともままならない状態だった。〈HP-5〉

周囲をやっとの思いで見回せば、あなたの顔のすぐそばに、目を見開いたまま絶命している人間の亡骸があった。顔をそむけたかもしれない。

しかしそこには瓦礫の下敷きになってひしゃげた子供の姿があった。

炎に抱かれた町、そして炭化した人間の残骸、肉塊と血潮、地獄の光景が広がっていた。もはやどこを見ても火と血、そして死で満たされた絶望の波に世界は吞まれていた

もしかしたらあの世界を共に脱した片割れの姿を探すかもしれない。

赤黒く焼けた空の最中、“ソレ”は存在していた。

黒い触手に包まれた大きな奇妙な緑色の瞳を持つ怪物……否、神と呼ぶべき存在。かつてあなたがそうであったものに近しき存在。

“シアエガ”そして、あなたの友人であったもの。〈SANC 1D3/1D10〉

それは触手を振り回し、次々に建物を倒壊させ、人々を押しつぶし赤い雨を降らせている。

〈目星〉

黒々とした触手の中に、今にも飲み込まれそうな{HO1}を発見する。

あなたはなにかをしようと体を懸命に動かすかもしれない。
それでも力は入らず、伸ばした腕は空を切り、指は土を掴むばかり。
足はまるでいうことを聞かず、ただただ鉛のように重い体があなたの意思を邪魔していた。

そんな時、あなたの耳に届く声があった。 ……歌だ。
直後、あなたの手にあたたかい手が重ねられる。そちらを見ればエルダの姿があった。体のあちこちに火傷や裂傷を負いながらも懸命にあなたに語り掛けるように歌い続けている。しかし、その声はいつもの澄んだ音ではない。喉が焼けたのだろう、掠れて今にも消え入りそうな声だった。

癒しの歌。あなたが記憶を失った中でも覚えていた歌。
傷が少しずつ癒えていくのがわかる。体は動かせる程度にはなってきた。
周囲の人間の少数も、息を吹き返しせきこむ者や 傷が癒えていくことに驚く者もいた。〈HP+1D5〉

その声に反応したのかは定かではない。
かの暴虐を尽くしていた神はこちらにその巨大な目を向ける。
触手の1本がこちらに向かって伸びてくるのが見えた。

その刹那、なにかが目の前に躍り出る。金色の短い髪が背中越しにぶわりと靡くと、人影はその方向に向かって手を伸ばし何かを唱える。瞬間、触手の軌道は寸前で逸れた。

彼はこちらを肩越しに見やると、そのまま地面に何かを描き再度何かを唱える。
その間にも自分たちを囲う半透明の障壁のようなものが生成されていく。

「これもいつまでもつかわからない 体勢を立て直してくれ」



■ 障壁

「被害を逸らす」と「ナーク=ティットの障壁の創造」である。

■ スチル

現実世界での目覚め
助っ人(HO2)

間違いようもなくそこに居たのはハーゲンだった。

彼は肩で息をしながらも再度自分たちを背に庇いながらシアエガを見つめている。よく見れば片腕は無く、そこからとめどなく血があふれ出している。

最低限の止血はしているものの、ふらふらな状態だった。

ハーゲンはそれを気にも留めず、こちらの回復が済んだ頃合いに話を続ける。

「シアエガの封印はもう無理だ。あの状態までデカくなったら呪文の干渉も難しい。それにすでに封印の石像……ヴァイエンも祭壇もすべて使い物にならない。{HO1}がああ神に打ち勝つのを祈るしかない」

「俺たちにできるのは{HO1}のサポート。それだけだ。{HO2}、あいつと深く関わり、心を通わせたお前にしかできない。頼めるか？」

彼は真剣な表情であなたに問いかける。

了承するのなら彼は安心したように微笑み、ともに戦う意思を示すだろう。

ハーゲンは、再度敵のほうへと向き直り何かを詠唱し始めた。

「イチカバチかだが、こちらも別の神の断片を招来させる。共食いさせれば最終的には相殺させられるはずだ」

彼の右目……ODINが淡く輝き始めた。

■ 別の神の断片

ODIN を媒体にアザー・ビーコンズを起動させ、フラクタルの神(ヨグ=ソトースのとり姿の1つ)の断片を招来しシアエガを弱らせようとしている。

VS.HO1(シアエガ)戦

HO1、HO2 それぞれ別の処理が発生する。

■HO1

シアエガに取り込まれつつある HO1。

現状できることはこの神に呑み込まれないよう抗うことそれだけだ。

■HO2

ハーゲン は HO1 の支援のため以下の作戦を提示する。

- ・まず HO1 の精神を呼び戻さなくてはならない。HO2 の「歌」の力で HO1 の心の力を励起させ、シアエガのコントロールから外れさせる。
- ・シアエガのコントロール下から抜け出すことができれば、次は逆に HO1 がプロビデンスを用いてシアエガの制御を行う。
- ・そのためにはシアエガをある程度弱らせる必要がある。

■特殊戦闘のおおまかな流れ

【防衛戦】 → 【迎撃戦】 → 【シアエガの制御】

■防衛戦

シアエガ(HO1)の侵攻を食い止め、HO1 の精神がシアエガに打ち勝つための時間を稼ぎつつ支援を行う。

■迎撃戦

HO1 がシアエガのコントロール下から抜け出したのち、改めて制御下に置くためにシアエガを攻撃し弱らせることになる。

■シアエガの制御

シアエガを弱らせることができればプロビデンスを用いてシアエガの制御を行う。判定等は特に必要無い。

注意：第一話～第三話の間で「蘇り」を使用してしまった場合 **〈蘇った回数×5〉**

全ての技能にマイナス補正が入る。SANC も同様。

発狂：この戦闘の間「発狂」ロールは以下のオリジナル発狂表を用いる。

短期発狂のみ採用し、長期の狂気に関しては今戦闘のみ無視する。

■各戦闘の詳細

シナリオでは各戦闘前に HO ごとの具体的な行動を提示するように記載しているが、予め全体を公開しても構わない。

KP の出しやすい形、PL の理解しやすい形で提示すること。

《オリジナル発狂表》

1. 「焦燥」相手を助けなくてはと躍起になる。
〈1D3〉ターンの、間ラウンドの最初に〈1D3〉のSAN値減少が起こる。
2. 「達観」この絶望的な状況をどこか第三者的に見てしまう。
〈1D3〉ターンの間、〈全技能-10〉
3. 「神性」己の起源である神に一時的に精神が寄ってしまい、自身の意識が薄れる。
〈1D5〉ターンの間、〈全技能-10〉
4. 「逃避」恐怖のあまり逃げ出したくなる。
〈1D3〉ターンの間「スタン(行動不能/回避可能)」状態となる。
5. 「衝動」：内から湧き上がる破壊衝動に身を任せてしまう。
〈1D3〉ターンの間「攻撃」技能しか振ることができない。

○NPCの行動 ※KP情報

NPC達も戦闘には参加するが基本的に以下の行動以外は行うことが出来ない。
敵の攻撃対象も処理が煩雑になるため基本的にはPCに固定してよい。

【エルダ】 《エルダの子守歌》 判定：〈芸術(歌唱)〉をHO2と共に行動。
場合によってはオラトリオによる回復も行う。
迎撃戦にてHO2に力の譲渡を行う。

【ハーゲン】 基本的にディレイを行い、HO2の回避失敗時のカバーを行う。
迎撃戦のみ「細胞暴走」で攻撃支援に入る。効果はHO1と同じ。
細胞暴走のコストは省略可。
ただし、現在負傷しているため5回が限度だろう。

△ シアエガ マレウス・モンストロルム(P175参照)

STR: 60 CON: 120 SIZ: 200 DEX: 14 POW: 34 INT: 20

耐久力: 160

〈触肢〉 100% ダメージ: 8d6

特殊: 貫通する武器からは最小値のダメージしか受けない。

HO2の「ララバイ」無効

■ 細胞暴走

コスト: SAN値 〈1D6〉

HP 〈1D3〉

タイミング: 自分のターン

効果: 「回避不可」の〈4D6〉ダメージ

防衛戦

■防衛戦の流れ(再掲)

シアエガ(HO1)の侵攻を食い止め、HO1 の精神がシアエガに打ち勝つための時間を稼ぎつつ支援を行う。

■HO1 の行動指針

HO1 の行動=シアエガの行動となる(シアエガの行動は無し)。

毎ラウンド 〈SANC〉を行う。失敗した場合シアエガの精神に抗えず破壊を繰り返してしまうという判定になる。

SANC の成功回数が「15 ラウンド以内に5回」に到達した時点で防衛戦クリア。SAN 値が0 になった時点で敗北。

■HO2 の行動指針

《エルダの子守歌》 判定：〈芸術(歌唱)〉を用いて HO1 の精神を^{れいき}励起させる。

成功した場合 SAN 値を 〈1D10〉回復させることができる。

この回復は自分にも適用される。

■HO1 が 〈SANC〉 に失敗した場合

HO1 は SAN 値 〈-1d6〉

HO2 は破壊行動による瓦礫を避けるための 〈回避〉。

失敗した場合は 〈1D4〉 のダメージを負う。

※NPC 達の処理は煩雑になるため省略してよい。

○NPC 達の行動

【エルダ】《エルダの子守歌》を用いた回復行動。

【ハーゲン】詠唱を行っているため戦闘には不参加。

HO2 のカバーリングは可能。

▼また、進行具合によって下記イベントが発生する。

【イベント発生条件】

▶イベント1：HO1 が2回 SANC に成功した時

▶イベント2：HO1 が5回 SANC に成功した時

▼イベント1

発生条件：HO1 が2回 SANC に成功した

{HO1}、あなたはすぐそばに何者かの気配を感じる。

それはあなたの肩に触れ、まるで激励するかのように強く握った。

目線だけを動かしてそちらを見れば、幻影なのだろうか。

リンと母・ノルンの姿がそこにあった。彼女らは力強く頷き、そして一瞬瞬くようにその体を光らせる。それはあなたの体に溶け込み、そして一体となった。



「お前のおかげでようやく解放された。そして今お前の力になることができる」

「勝ちなさい、{HO1}。お前はいつだって1人じゃない」

「お前の命には私やお母さん、エルダや{HO2}、いろんな人の祈りと願いが共にある」

「お前を愛している」

ほんのりと心臓があたたかいような心地になる。

そうだ あなたの命は数多の顔も知らぬ人間たちの祈りと願いによって繋がっている。SAN 値 〈+5〉

▼イベント2

発生条件：HO1 が5回 SANC に成功した

あなたは抗い続けた。

{HO2}とエルダの優しい旋律、ハーゲンの補助。あなたを愛した人々の思いを受け取って、まるで暗雲のように立ち込めていたシアエガの瘴気を振り払う。

もや
靄がかった意識は明瞭となる。

今、あなたの精神はあなただけのものとなった。

これより、迎撃戦へと移行する。

■ スチル

祖母、母の助け

迎撃戦

■迎撃戦の流れ(再掲)

HO1 がシアエガのコントロール下から抜け出したのち、改めて制御下に置くためにシアエガを攻撃し弱らせることになる。

■HO1 の行動指針

身体を拘束されている為、武器による攻撃は不可能。

プロビデンスを用いて内側からシアエガを攻撃することになる。

スキル「細胞暴走」を用いた攻撃が有効だろう。

ただし、変わらず自分にもダメージが入り、HO1 の HP が 0 になる、もしくは HO2 側が全滅した時点で敗北となる。

また、ここからシアエガと HO1 の HP と行動順は別扱いとなる。

■HO2 の行動指針

外部からシアエガへの攻撃を行う必要がある。

しかし、自分の歌声や攻撃はかの神に届くのだろうか……？

ONPC 達の行動

【エルダ】 イベント 1 にて HO2 に力の譲渡を行い、その後は行動不能。

【ハーゲン】 「細胞暴走」で攻撃支援に入る。

効果は HO1 と同じ、回避不可の〈4d6〉ダメージ。

コストの処理は省略可。

ただし、現在負傷しているため 5 回が限度だろう。

▼また、進行具合によって下記イベントが発生する。

【イベント発生条件】

▶イベント 1 : HO2 最初のターン

▶イベント 2 : シアエガの HP が 80 以下になった時

▶イベント 3 : シアエガの HP が 0 になった時

■迎撃戦補足

迎撃戦の勝利条件はシアエガの体力を「0」まで減らすことである。

ラウンドは防衛戦から継続(防衛戦で最後に行動した者の次から開始する)になるため、イベント 1 のタイミングに注意すること。

▼イベント1

発生条件：HO2 の最初のターン

エルダが{HO2}、あなたの手を握った。

何事かとそちらを見れば、エルダは微笑む。

「ぼくらは、元は1つの神様だった」

「君にぼくのすべてをあげる。……一緒に、{HO1}を助けよう」

「ぼくはもう、無理みたいだから」

エルダは強く HO2 の手を握る。その口の端からは血がしたたり落ちている。

よくよく見れば服に隠れて見えない部分から血がぼとぼとしたり落ちている。無理をしていたのだろう、その目にはすでに光が失われつつあった。

{HO2}が了承しても、しなくても、エルダはそっとその体を抱擁する。



体が触れあった瞬間、エルダの体がまるで光の帯となり{HO2}の体をまるで蚕の繭のように包み込んだ。

光の繭のなかは水で満たされ母の胎内を思わせた。あなたの体はその羊水のなかにふわりと浮かぶ。

繭はところどころ割れ、外界を映し出す。その繭の裂け目に1つの巨大な球体が形成される。それは目だった。巨大な紅蓮の瞳だった。

直感的に理解する。この姿こそあなたの あなたの本来の姿。

{HO1}、そしてハーゲンの視点に移そう。

{HO1}、あなたは目の前のその光景に目を見開くかもしれない。

あなたを侵食するシアエガも同様のようで、繋がった感覚越しに、ほんの少し

おのの
 慄いたのを感じる。

■ 攻撃対象

イベント1が起こった時点でシアエガの攻撃対象は街ではなく完全体となった HO2 に移行する。

■ スチル

エルダとの融合

そこにあったのは1つの惑星の、人間にとっては巨大で、しかし数多の星々からすれば矮小^{わいしょう}な模造品に見えた。さびのような赤色をした巨大な球。その表面は灰や融解^{ゆうかい}した鉄でできているように見えた。ひび割れたその地殻から覗く海には巨大な赤い目がこちらを睨みつけていた。

今、ここに二つの巨大な目を持つ神が、互いを見つめあった。

ネメシス、先触れ、造物主。

外なる神「グロース」の幼体を見た{HO1}は〈SANC 1D5/1D20〉

■HO2のステータスを変更

STR：該当なし CON：計測不能 SIZ：200 INT：HO2と同じ POW：100

DEX：14 耐久力：100 MP：100

※巨体であるため回避不可のバッドステータスが付与される。

《葬送行進曲》

コスト：MP1D6 タイミング：自分のターン 判定：〈芸術：(歌唱)〉

エルダからの力の譲渡によって《カプリチオ》が強化された。

対象を「単体」に変更する代わりにダメージの値を〈4D6〉に上昇する。

《終曲》

コスト：受けたダメージ分のMP タイミング：自分が攻撃を受けた時

判定：〈芸術(歌唱)〉

エルダからの力の譲渡によって《オラトリオ》が変化した。

判定に成功すれば敵の攻撃を受けた際にダメージを「MP」で肩代わりすることができる。

{HO2}、あなたの傍には常にエルダの気配を感じる。あなたがたはかつて1つだった。それが2つになりずっと共にあった。今もなおそれは変わらない。

あなたの傍でエルダは生き続けている。そして戦っている。愛した女性が守りたかった世界と、人々、そして家族と片割れ、友人を守るために。

もはやあなたがたを引き裂く者など、存在しない。

▼イベント2

発生条件：シアエガの HP が 80 以下になった時

シアエガは苦し気にのたうち回っている。

四方八方に振り回される触手により、町はいっそう破壊されていく。

このままではあのデタラメな攻撃で町ごと沈下してしまう。

そんな嫌な予感が、脳裏をよぎった。

刹那、ハーゲンの右目の^{オーディン}ODINが黄金に輝き始める。

「アザー・ビーコンズ起動」

「外なる神の侵入を検知。今すぐ動作を中断してください」

機械的なアナウンスが流れるも、彼はふらつく足を叩きしっかりと踏ん張り、

「承認する。フラクタルの神、ヨグソトースの断片〈略奪するもの〉の招来を履行する。さあ、蹂躪せよ！」

そう、応答した。直後、彼の右目からぬるりと何かが這い出る。

それは黄金の触手のようにも思えた。触手は一直線にシアエガに向かって伸びるとその体を雁字搦めにする。

「これは……どうしたことだ」

ハーゲンは一瞬驚いたように目を見開いたのち、そんな動揺の声をあげる。

何やら、予想外の事態だったようだ。

触手はやがて、ずるりずるりと彼の右目から解放されたあと、人の形をかたどり始める。

「やだなあ、あんな汚らわしいのと一緒にしないでよ。まあ兄弟みたいなものだけど」

「ちょっと無謀すぎるんじゃない？あいつは、人間の言うこと聞くようなタマではないからね」

光が収束するころ、そこに現れたのはアルバだった。

彼はこちらに振り向くと、へらりと笑う。

「あ、ごめんねえ！手近な門を探してたら結構強引に出てきちゃったみたい」

「あんまり手出しするなって怒られてね。でもまあこれくらいなら許されるでしょ」

「私は抗う人間が好きなのさ。それがどんなに救いがなくともね」



彼は再び黄金の光をまとい始め、周囲には蛍のように輝く光の粒子が舞った。

■ スチル

アルバの助け

■特殊効果：HP、MP を全回復

▼イベント3

発生条件：シアエガの HP が 0 になった時

シアエガはあの猛威を振るっていた面影はどこへやら。

すでに触手の何本かは千切れ、目の光も失われつつあった。

そんな中、{HO2}……グロースの幼体の地殻に何かが降り立つ気配がある。

「正直お前たちがここまでやれるとは思っていなかった」

「捨てたものではないな。人類というものも」

ヴァルトラウテ……否、ヌトセ=カームブルが厳かな様子でそこに立っていた。

彼女は{HO2}に向き直ると、自身が持っていた槍を差し出す。

「あらゆる邪悪を、世界を打ち砕く槍だ」

「さあ、お前の手で、神々の黄昏に終止符をうつんだ」

「やつを、助け出してやってくれ」

彼女は誇らしげに笑い、{HO2}が揺蕩う海の中に槍を投げ入れる。

それは水圧によって勢いを弱め、目の前に静止した。それを手に取れば、槍は黄金に輝き始め、今にもあの邪な神のもとへと飛びかかろうとしている。

「祈れ、願え、それらは人にしかできぬことだ！ そうすればその槍はお前の想いに応えてくれる！」

▼槍を放つ

あなたは想いと共に槍を放った。

それは瓦礫の山を越え、人々の屍を超え、火の海を掻い潜り。

そうして、ようやく愛しい人のもとへとたどり着いた。

黄金の槍が神の体を突き刺し貫いた。

その瞬間、まるで空気の抜けた風船のようにその一点から瘴気があふれ、徐々にその体は縮んでいく。

■ 世界を打ち砕く槍

槍は判定なしでシアエガに突き刺し、この戦闘を終わらせることができる。

HO2 の PL にそう伝え、演出をしてもらうのもいいだろう。

シアエガの制御

{HO1}、あなたは今ならこの神のすべてを己が物とできることを悟る。

すべての神経、意識、すべてがこの神の隅々まで張り巡らされていく。

瘴気はその体から抜け出しどこかへと退散していくのが分かった。

一部はすべてとなり そして全てはあなたとなった。

巨大な緑色によどんだ目が一度閉じられたかと思えば、それは再度見開かれる。

そこにあったのは青色に輝く美しい瞳だった。

その姿はまさに黄昏の空に浮かぶ「神の目」 ——プロビデンスの目。

あなたは今、シアエガではない。

青き目の造物主、命の箱舟、最後の希望。未だ名もなき神の一柱となったのだ。

別れの時

戦いは終わりを告げた。

辺りには静けさが戻る。

しかしそれは決して安堵からくる平穏な静けさではなく、死と破壊による虚無なのだ。あなたがたは感じ取ることができるだろう。

戦いに勝ったとしても 失われたものが戻ることはもうないのだ。

恐らくこの神による被害はドイツだけではないのだろう。今この世界にはどれだけの人間が生き残っているだろう。死の星と化したこの地球には。

……そしてその死の足音はすぐ傍にも近寄っていた。

突如、ハーゲンがその場に倒れ伏す。もはや限界を超えているのだろう、息も絶え絶えであり、おそらく手の施しようがないことは明らかだった。

それでもなお彼は探索者を心配そうに見つめていた。

「……少しは役に立てただろうか」

「それなら、うれしい……」

……ほんの少しの会話の後。

彼は死の間際まで満足そうに、そして愛おしそうに探索者を見つめていた。

※一話⇒三話のボーナスターンで HO1 がハーゲンとの記憶を思い出していた場合

◆HO1 へ秘匿情報

その表情は、かつてあなたへ花を差し出した日の笑顔とよく似ていた。



やがて息が、鼓動が止まり、その目から光が消える。

アルバは少し目を伏せて、悲し気に彼を見守っていた。

■ スチル

ハーゲンの死(走馬灯)

また、ボーナスターンで情報を取得出来ていなくても、KP 采配にて彼と幼少期に出逢っていた、という記憶を HO1 に思い出させても良いだろう。

世界の選択

アルバは彼を見送った後、探索者に向き直る。

ヌトセ=カームブルもまたその隣に立ち、行く末を見守るだろう。

「さあ、探索者。君達は神に打ち勝ち、終焉のシナリオを回避した。しかしこの世界は御覧のあり様だ。もはや人間の力だけでの復興は難しいだろう」

「それにシアエガの復活に影響された他のグレート・オールド・ワンや眷属達が目覚めつつある」

「我々旧き神はこの地球を見限った。しかし、君達の勇気と行動に、君たちの紡いだ物語に一種の可能性を見出している」

「代償を払うなら、今一度だけ我々は君たち人類に手を貸そう」

■旧き神々が提示する道

- ・ {HO2}の存在を代償に世界を再構築する。
- ・ 新たな神格となった{HO1}の中にドリームランドを形成し、人類の魂だけを存続させる。

「1 つ目。これは単純に今まで行われた旧き神々の干渉による世界の巻き戻し。ただし代償として{HO2}の存在をこの世界、時間のすべてから抹消する。つまりはじまりを消すことでこの物語が起こる因果をすべてなかったことにするということだ」

「2 つ目。新たな神格となった{HO1}、君ならば世界の礎としてドリームランドを維持するに十分だろう。ヴェルゼが行った不完全な世界の構築より更に完璧なものを作り出し、そこに失われた魂たちを住まわせる。その代わり{HO1}、君はその世界で生きることはできない。永遠にこの孤独な世界で一人生きることになるだろう」

旧き神々が提示したものは、どちらかの自己犠牲によって世界を救うというものだ。あなたがたはこれに納得ができるのだろうか。すぐに選んでしまえるのだろうか。

■ 第三の選択肢

PL が悩む、あるいは探索者が納得できない、という場合は〈アイデア〉などで第三の選択肢があるのではないかと問いつけて良い。

◆HO1のみ 〈アイデア〉

「パンスペルミア」という言葉を思い出す。

かつて人間だったヴェルゼが行った、生命の種を他の惑星に撒き散らして人間が住むことのできる惑星を作り出す、というものだった。

プロビデンスはかつてその計画で使われた命の箱舟。それならすべての生命の記録を持ち、世界さえ作り出したプロビデンスと、神となった自分が在れば、自分自身を「生命の種子」に変換して地球に撒き散らし、失われた命と抉れた大地を取り戻すことができると思いつく。

◆HO2のみ 〈アイデア〉

旧支配者たちの目覚め、そして眷属たちの活性化は今の自分なら鎮めることができるのではないかと思いつく。

しかし神とはいっても自分はその一端であり、地球上のすべての神々を鎮めるためにはもはや自分自身の存在を賭けることになるだろう、と確信する。

■ 最終選択

左記の〈アイデア〉に失敗した場合も PL の〈リアルアイデア〉を採用したり、一話〜三話を含めた今までの情報を見直すことを促すなど、フォローは積極的に行って構わない。

エンド分岐

四話での探索者の選択・戦闘の結果によりエンディングは以下に分岐する。

▽ ヴェルゼとの闘いに敗れる

⇒ エンド A : Aeonian(エーオニアン)

▽ シアエガに敗北する

⇒ エンド B : Brutish(ブルーティッシュ)

▽ H02 の存在を代償に世界を再構築する

⇒ エンド C : Complete(コンプリート)

▽ H01 のなかにドリームランドを形成する

⇒ エンド D : Dream(ドリーム)

▽ 「パンスペルミア」を H01、H02 の手で行う

⇒ エンド E : Earth(アース)

※卓報告の際はエンド A～E のアルファベット表記と生還/ロストのみ報告可能

エンドA：Aeonian(エーオニアン)

夢は、覚めるから夢なのだ。

それでもあなたがたは目覚めることはできなかった。

目の前のヴェルゼだったものは、その巨大な瞳を伏せ咬いた。

「大丈夫」

「きっともう君たちが苦しくないようにできるから」

「だからもうおやすみ」

「幸せな夢をありがとう」

意識は白んでいく。何もかもが白に染まっていく。視界も記憶も。

目の前の存在はなんだったのだろうか。

あの悲し気にこちらに微笑む彼は一体 誰だったのだろうか。

「時は今。今この時。時は過ぎ、時は未来、すべての君たちに。蛇は尾を食らい、骨の輪は作られた」

この泣きそうな声は一体誰のものだったのだろう。

.....
.....
.....
.....

「お客さん、お客さん？」

はた、と気が付く。金髪の男性がこちらを心配そうにのぞき込んでいた。

彼はこちらが気付いたのに安堵したのか胸を大げさに撫でおろし「よかった〜。

いやあ、何度呼んでも反応がないものだったから」と、笑顔を浮かべた。

■ 時は今

「Darkness, my name is」の
一節のオマージュである。

彼は自分たちから視線を逸らすと周囲に目をやる。

そこには様々な絵画や骨董品が並んでいた。

そう、あなたたちはアノマリオール博物館という一部のマニアしか知らない、貴重な作品が集う博物館に来ていた。

確かそう、誰かに誘われて、仕事の一環として見に来ていたのだ。

{HO1}、あなたは古物研究家だ。左目は生まれつきの病で失明している。

{HO2}、あなたは記憶喪失だったが、{HO1}と知り合い行動を共にしていくうちになんとか不自由ない生活を送っている。そんなあなたがたの元には奇妙な作品や事件もたびたび舞い込んでくる。そんな中でこの博物館に来ることができたのは幸運だったのか、それともその奇妙な縁があなたがたを呼んだのかは不明だ。

男性は学芸員でもない様子だが隣でべらべらと作品の説明をしてくれた。

異様に人懐こいような様子の彼に少しいぶかし気な視線を送ると少し寂し気な表情を浮かべるのはなぜだろうか。

「さてこっちは……ああ、そうそう。これが目玉商品なんだ。まあ商品じゃないけど」

彼は一つの作品の前に止まる。

そこにはガラスケースに収められた……青い球体のようなものがあった。

光に透けてなにか幾何学的な模様の見えるそれは、どこか機械のような印象も受けた。タイトルには「プロビデンス」と書かれている。

「これはかつて義眼として使われていたみたいだよ。なんでもいわくつきで、少年の幽霊が憑いていて、つけるとその少年が話しかてくるんだって」

「もしかすると今でもこの中にいるのかもね」

彼はからからと笑うと「それじゃあこのへんで」とあなたがたから遠ざかっていく。

プロビデンスの深い青があなたがたを見つめている、ような気がした。

「何を見てるの？」

背後から声を掛けられる。そこにはエルダと、ハーゲンの姿があった。

彼らも一緒に来ていたのだった、と忘れていたことを内心思い出していれば少しむくれたように「あ〜、作品に夢中でぼくらのこと忘れてたね？」と拗ねるエルダ。ハーゲンはなだめる様にやれやれと肩をすくめながらも苦笑している。

今日も変わらず世界は平和だ。

丸く切り取られた天窓から差し込む光に目を細める。

空は相変わらず青かった。

突き抜けるようなその色になにかを思い出しそうながしたが、すぐにその胸騒ぎのような予感は過ぎ去ってしまった。

さあ、今日は何をしようか。

—— 探索者ロスト

▽エンドA：Aeonian/エーオニアン

ヴェルゼによって破滅の瞬間まで偽りの世界に閉じ込められるエンド。

ヴェルゼの存在は抹消され、それ以外は幸福なつじつま合わせがされた優しいだけの世界である。また、不可思議な現象はあれど君達を脅かすものは存在しない。そのため、探索者としてもロストとなる。

エンド B : Brutish(ブルーティッシュ)

人は、神には勝てない。

そうだ、これは英雄譚ではない。奇跡もなにもかも起こることはない現実なのだ。少なくとも、我々にとっては。

神の蹂躪は止まらない。

歌はもう聞こえなかった。

「やっぱりここまでかあ」

男は青い球体を指で転がす。つまらないものを見るような目でそれを眺めたあと、手の中に包み込み、ひと思いにぐしゃりと握りつぶした。

暗転。

「でも楽しかったよ。さあ、次はどれにしようかなあ」

まるで子供が宝物をしまった箱をあけるかのような無邪気さで、暗闇に浮かぶ数多の星のひとつをつまみ上げる。青い星。生命の星。

そこに住まう者が地球と呼んだかもしれないもの。

「さあ、次の地球はどんな歴史を歩むのかな」

黄金の瞳はまるで月のように輝いた。

神の手のなかで青い星はぼんやりと光っていた。数十億の命を乗せて。

—— 探索者ロスト

▽エンド B : Brutish /ブルーティッシュ

探索者がシアエガに敗北することで、抗う者は居なくなる。

人類は滅亡し、旧き神々もこの衰れで野蛮な星を見捨て、次のおもちゃを見つけることだろう。

エンドC : Complete(コンプリート)

{HO2}、あなたを犠牲に世界を巻き戻すことを決めた。

迷ったのだろうか。それとも1より100をとることに抵抗はなかったのだろうか。どちらにせよ{HO2}の犠牲によって数十億の命を救うことを選んだのだ。

アルバは少しばかり目を伏せ、そして静かに頷いた。

「勇敢な判断だ」

「君の犠牲によって世界は救われる」

その刹那、アルバの体が光り輝き始めた。徐々にその形はぐにやりぐにやりと形を変え、肥大し、そして空を覆った。

巨大な、優雅に動く連結した黄金の球体群が最悪の悪夢のうごめくさまを半ば隠していた。〈SANC 1D8/5D10〉

世界は黄昏に染まる。血も炎も遺骸も何もかも。

意識は白んでいく。

最後に見えた、自ら世界の贄になると決めた友は一体どんな顔をしていたらうか。手を伸ばせどもはや届かない。

彼/彼女はこの壊れた世界と、心中したのだ。

まるで炎に愛のため身を投げたブリュンヒルデのように。

.....
.....
.....
.....

■ 最期の SANC

ここで探索者が SANC0 になっても HO1 は巻き戻りですべて元通りになり、HO2 も世界の贄となるため、エンディングに影響はない。RP 等の後に描写を続行すること。

目を、覚ます。

どうやら^{うたたね}転寝をしていたようだった。

何か夢を見ていたような気がするが思い出すことはできない。空はもうすっかり昼と夕方の合間のうすぼんやりした色をしていた。時間を確認しようと携帯端末を取り出す。一瞬、黒い画面に映った自分の顔に違和感を覚える。

自分は、こんな顔だったのだろうか？

……いいや、寝ぼけていただけのようだ。その違和感もすぐに消えてしまった。
あなたには帰るべき場所があり 明日には仕事か学校に行かなくてはならない。

あなたはどんな人生を送っているだろう。それは、私にはわからないことだ。
もはや君はこの物語の登場人物ではなくなった。それならば君は自由に、君の
生きたいように生き、そして死ぬこともできるのだろう。

また別の気まぐれで振った賽子によってその命運を決められながら。

「さて この続きはもう私には語ることはできない。」

私はそっと本を閉じた。

この先は、君しか知らない。

—— HO1 生還/HO2 ロスト

「巻き戻り」の代償としてこのシナリオ自体がなかったこととなり、HO1 も存在そのものを書き換えられてしまったためキャラクターシートは作り直しとなる。
今シナリオの記憶を引き継ぐこともない。

▽エンド C : Complete/コンプリート

HO2 を犠牲に世界を巻き戻す。

結果的にこの物語が起こるすべての起点をなかったことになるため、生き残った HO1 は爛爛探索者ではない別の何者かになる。NPC でこの世界に残るのはハーゲンのみだろう。彼もまたおそらく別の人生を送っているのかもしれない。

■ 語り手

途中語り口調や一人称が「私」になっているのは仕様である。
語り手であるアルバが地の文を乗っ取り語っている、という演出。

エンド D : Dream(ドリーム)

{HO1}、あなたを世界の礎に、人々に幸も不幸もある世界の夢を見せることを決めた。

それしか人々を救う手立てはないと思ったのだろうか。それとももう夢に救いを求めたのだろうか。どちらにせよ、この絶望的な状況の中、藁にもすがるように思っていたのかもしれない。

アルバは少しばかり目を伏せ、そして静かに頷いた。

「夢まぼろしに救いを求めるのもまた人の性」

「いや、そもそも、夢まぼろしでない世界などたしかにないのかもしれないね」

その刹那、アルバの体が光り輝き始めた。徐々にその形はぐにやりぐにやりと形を変え、肥大し、そして空を覆った。

巨大な、優雅に動く連結した黄金の球体群が最悪の悪夢のうごめくさまを半ば隠していた。〈SANC 1D8/5D10〉

世界は黄昏に染まる。血も炎も遺骸も何もかも。

意識は白んでいく。

最後に見えた自ら世界の贅になると決めた友は一体どんな顔をしていただろうか。手を伸ばせどもはや届かない。

彼/彼女は夢見る神となったのだ。

哀れジークフリート、世界はお前の死によってのみお前への愛を思い出すのだ。

.....
.....
.....
.....

■ 最期の SANC

ここで探索者が SANC0 になっても HO1 は世界の礎になり、HO2 もドリームランドの構築後元通りになるため、エンディングに影響はない。RP 等の後に描写を続行すること。

「ねえ、ねえってば」

はた、と気が付く。金髪の男性がこちらを心配そうにのぞき込んでいた。

彼はこちらが気付いたのに安堵したのか胸を大げさに撫でおろし「よかった〜。いやあ、何度呼んでも反応がないものだったから」と、笑顔を浮かべた。

彼は自分たちから視線を逸らすと周囲に目をやる。

そこには様々な絵画や骨董品が並んでいた。

そう、あなたたちはアノマリオール博物館という一部のマニアしか知らない、貴重な作品が集う博物館に来ていた。

確かそう、エルダに誘われて 特に何の予定もなかったあなたはその誘いに乗ったのだ。エルダといえばあちこち興味津々といった様子で見回っており、ついさっきはぐれたところだった。

ちょうど一人だったあなたに近寄ってきたこの男性は学芸員でもない様子だが隣でぺらぺらと作品の説明をしてくれた。異様に人懐こいような様子の彼に少しいぶかし気な視線を送ると少し寂し気な表情を浮かべるのはなぜだろうか。

「さてこっちは……ああ、そうそう。これが目玉商品なんだ。まあ商品じゃないけど」

彼は一つの作品の前に止まる。

そこにはガラスケースに収められた……砕けたガラス片があった。

光に透けてなにか幾何学的な模様の見えるそれは、どこか機械のような印象も受けた。タイトルには「{HO1}」と書かれている。

その名前にふと、何か懐かしさがよぎる。

聞いたこともないような名前だった。不思議に思っているうちにそんな不思議な感覚も消えていく。気のせいだったのだろう。

「ねえ、どうしてこれは割れているの？」

いつの間にか横には小柄な少年が佇んでいた。

大きな帽子を深く被った少年は、そのガラス片と同じような青い目をしていた。

青い目からは涙が零れ落ちている。少年はなぜ、自分が泣いているのかもわかっていない様子だった。

金髪の男性は少年の背をさすると「きっともう役目が終わったからだよ」と穏やかな声で応えるだろう。

ガラス片の深い青はどこまでも澄んでいた。

—— H01 ロスト/H02 特殊生還

H01 が作り出したドリームランドの中に生き続ける存在であるため、継続探索者として使用する場合は夢系シナリオなどに限定される。

また、今シナリオの記憶は一切保持していない。SAN 値や成長した技能もすべて初期に戻る。

▽エンド D：Dream/ドリーム

H01 の中に現実に関わりなく寄せたドリームランドを構築するエンド。

H01 が神格となったことで半永久的に世界の維持が可能となった。

エンド E : Earth(アース)

あなたがたはこの星の命をなにひとつ諦めたくなかった。

何よりもお互いを諦めたくなかったのかもしれない。

自分たちは花ではない。だから自由に生まれる場所も、生きる場所も、選ぶことはできるのだ。

アルバは一瞬目を丸くしたあと、くすりと笑った。

「なるほどそれは妙案だ。思いつかなかった！そうか、そうか。それはなかなか大胆で、面白い」

「もともと見捨てるつもりだった星だ、さあ好きにするといい」

「きっとそう、この星も、誰かがつなぎたかった命なのだろうからね」

彼は微笑むと、{HO1}の体に優しく触れる。

刹那、{HO1}……シアエガだったものの、の体は白く染まっていく。

そしてその体から伸びていた触手はまるで地に根をはるかのよう地上に張り巡らされていく。ぐんぐんと地球の隅々にまで行き渡り、その末端すべてを感じ取ることができた。大地の脈動 海の血潮 風の呼吸。

この生命の死に絶えた世界でなお、いまだこの星は生きていた。

地球は{HO1}に覆われた。

瓦礫も遺骸も、邪な神々の眷属も。すべてが飲み込まれていく。

やがて{HO2}もその白くあたたかな濁流に呑み込まれる。自分自身が溶け出していくようなそんな感覚に襲われた。それでも不思議と怖くはなかった。

あの神の蹂躪とは違った。何もかもを押しつぶし無理やりに丸めるのではない。

命と命が抱擁しあい、そして今1つの調和を生み出した。

地面に張った根の表面には無数のこぶのようなものが出来上がる。

こぶは数度鼓動のように脈打つと、そこから何かがすっくりと空に向かって伸びてゆく。それは大樹のようにも見えた。

まっすぐに天を仰ぐ白い幹の先には綿毛のような細い枝が連なっている。
枝先からはふわりふわりと雪のような、羽のような真っ白い胞子が飛んでいる。

HO1 〈命を紡ぐのに適切だと思う技能ロール〉

あなたの^{かいな}腕に抱かれた地球は少しずつあなたと一つになっていく。

抉れた大地に、燃えた緑に、地に伏し倒れた人々に。

あなたの愛は平等に降り注いでいく。息絶えた人々は息を吹き返し、抉れた大地は再生し緑は芽生え始める。まるでたんぽぽの綿毛のような胞子が、神となったあなたの体からふわりふわりと風に乗って飛んでいく。

それらもまたよどんだ空気を攫って包んで、優しいものへと変えた。

この世界のあらゆる傷と苦しみをあなたは癒していく。

HO2 〈世界に愛を歌うのに必要だと思う技能ロール〉

あなたは目覚め始めた邪な神々に、あるいは痛み苦しむ人々に、泣きわめく子供に、眠りの歌をうたう。ただただ安寧を届けるために。

あなたの祈りと願いは空気を振動させ 世界中に伝播していく。

いつの間にか常に鳴っていた、うめくような地鳴りは収まっていた。

あなたの歌は、この世界のあらゆる生き物に寄り添い、安らかな眠りをもたらした。

世界は少しずつ元の形を戻していく。すべてが元通りになるわけではなかった。

それでも命がなければ、人は前に進むことはできない。

彼らに一体どんな苦難が待ち受けているのかは想像に難くない。

しかし、世界は美しかった。

あなたがたが望み、生かした世界にはどこまでも突き抜ける青い空が広がり、海もまた青く輝き寄せては引く波のまにまに息づいている。

{HO1}の命は少しずつ胞子となって飛んでいく。{HO2}の声はやがて消えゆく。

あなたたちは世界となり、世界はあなたがたとなる。

▼探索者は、ここで RP を行うことができる。

これが人間としての意識を保っていられる間の最後の会話だ。

■ 最後の技能判定

この判定に失敗しても再構築自体は為されることとなる。
ただし、判定にどちらか一方でも失敗した場合、エンド描写でヴェルゼが登場しなくなる。

今のあなたがたは一体どんな気持ちなのだろう。

世界の始まりを見届け、そして最後の微睡に身をゆだねようとしたとき。

あなたがたの耳に届く声があった。

「ねえ、{HO1}、{HO2}。思い出したよ、世界ってこんなに綺麗だったんだ」

「君たちが教えてくれたんだ。案外未来は怖いだけじゃないって。抗うことをやめちゃいけないって」

「だから、僕も少しだけわがママを言うことにする」

「ねえ、もし次生まれ変わったら、きっと君達の友達になりに行く」

「だから、待っていて」

その声は誰のものだっただろう。ひどくなつかしい気がした。だがもはや、あなたがたにはその声の記憶をたどる気力さえ残されていなかった。

命の最後のひとしずくまで、この世界に与えて、そうして——

あなたがたは目を閉じた。

ここからはあなたがたの知らない物語。

そしてここからは“あなたがた”の物語。

世界は突如として謎の大災害に見舞われた。

奇妙なことに当時の状態を記録した映像などは残されておらず、人々は皆その災害が起こった時の記憶を無くしていた。世界各地の都市が多大な被害を被った、という事実だけがそこにあったのだ。死者はほぼ出ておらず、建物のみが倒壊したというのもこの災害の奇妙な点だった。

あと変わったことといえば、異様に緑化が促進したことくらいだろうか？

暫くはこの奇怪な事態に世間は騒然とするものの、数か月もすれば人々は興味を無くしていく。復興に追われてそんなことを気にする余裕もなかったのかもしれない。

「お客さん、お客さん？」

はた、と気が付く。金髪の男性がこちらを心配そうにのぞき込んでいた。

彼はこちらが気付いたのに安堵したのか胸を大げさに撫でおろし「よかった～。
いやあ、何度呼んでも反応がないものだったから」と、笑顔を浮かべた。

彼は自分たちから視線を逸らすと周囲に目をやる。

そこには様々な絵画や骨董品が並んでいた。

そう、あなたたちはアノマリオール博物館という一部のマニアしか知らない、
貴重な作品が集う博物館に来ていた。

各国の復興に向けたチャリティー目的の開催だったようで、一般人であるあな
たがたの元にも招待状が届いたのだ。

幸いにも先の災害による各国の美術品や歴史的建造物には大きな影響はなかつ
たとのことだった。まるで不思議な力に守られていたかのようにだと、関係者が語
っていたのを聞いたことがあるだろう。

{HO1}、あなたは古物研究家だ。

腕利きのあなたのもとには奇妙な作品や事件もたびたび舞い込んでくる。今日
はハーゲンという友人に誘われてここに来ていた。

{HO2}、あなたはエルダという兄弟に誘われこの博物館に来ていた。

あなたがたは、お互い知らない人間同士なのに、同じようなタイミングでぼう
っとしていたことに、少しだけおかしくなって、笑いがこみ上げる。

何か、長い長い夢を見ていた気がするのだ。

白昼夢というには長い夢を。

金髪の男は二人を見比べたあと、またマイペースに話を始める。

男は学芸員でもない様子だが隣でぺらぺらと作品の説明をしてくれた。

異様に人懐こいような様子の彼に少しいぶかし気な視線を送ると、少しおかし
そうに笑うのはなぜだろうか。

「さてこっちは……ああ、そうそう。これが目玉商品なんだ。まあ商品じゃない
けど」

彼は一つの作品の前に止まる。

そこにはガラスケースに収められた……青い球体のようなものがあった。

光に透けてなにか幾何学的な模様に見えるそれは、どこか機械のような印象も受けた。タイトルには「生命の種」と書かれている。

光の加減で少し白く曇った部分が透けて見え、波打っているような模様が見えた。球の中央にはなにか、白い綿毛のような模様が入っている。

「これはね、地球の抜け殻なのさ。かつて私たちが生きていた地球が滅亡の危機に瀕したとき、この小さな地球のなかに皆で避難していたんだ」

「そして勇敢な二人の神様が地球を救って、みんなを今私たちが生きている地球に戻してくれたんだって。二人の神様は今もこの地球そのものになって私たちを見守ってくれている……なんて。そんな物語があったら素敵だと思わない？」

おどけるように男は笑う。

▼最後の技能に成功していた場合

「素敵な物語だね 続きをぜひ聞きたいな」

後ろから、声がした。そこには小柄な少年が立っていて、目深にかぶった帽子の隙間から、あの青い球体と同じような青が覗いていた。

「……ねえ、約束まだ、有効かな？」

彼は少しもじもじと探索者に語り掛ける。

ああ、そうだ。と、あなたたちは思い出す。

長い長い命の旅は終わりを告げて、そして今ここに流れ着いた。

ようやくまた会えたのだとその青を見た瞬間に思い出す。

もうずっと前から自分たちはこの世界を望んで生まれ、そして生きてきたのだと。

ようやく巡った再会に喜ぶことになるのはまた別の話。

▼最後の技能に失敗していた場合

「素敵な物語だね 続きをぜひ聞きたいな」

後ろから、声がした。

だがそこには誰もいなかった。

ただ、それでも。その懐かしい声で。

かつてあなたがたと共にあったあの電子仕掛けの少年の声で。

ああ、そうだ。と、あなたたちは思い出す。

あなたたちは長い長い命の旅は終わりを告げて、そして今ここに流れ着いた。

ようやくまた会えたのだと もうずっと前から自分たちはこの世界を望んで生まれてそして生きてきたのだと。

ようやく巡った再会に喜ぶことになるのはまた別の話。

エピローグ

かつて1つの青い星で花開いた綿毛は、暗い宇宙空間を漂った。

1つは星に根付き、1つは未だ果てなき旅を続けている。

綿毛の1つははるか遠い、もはや生命の居ない静寂なる荒廃した大地にたどり着いた。それが地面に雪のように溶けると、その地点からぶわりと数多の植物が発芽を始める。

死の星はまた、鼓動を始めた。

数千年、数億年ののち、ここにも新たな文明が生まれるのかもしれない。

命は何度も繰り返す。

命は弱さを許さなかったかもしれない。

だからこそ、何度だって芽吹き めぐるのだ。

次の命をつなぐために。

——ぱたん。本を閉じる音がした。

「…さて、その種のひとつが芽吹いたのが今のこの地球というわけだ」

「あの二人が生きた地球には、未だ、邪なる神々やその眷属たちが息づいている。

きっとこれからもそこに生きる人々は抗い続けるのだろう。何度でも」

「信じられないって？はは、そうだね。ただ……覚えているといい。深淵を覗くとき、君達もまた深淵に覗かれているのだと」

目の前の男はふわりとまるで愛おしそうに微笑んだ。

その瞬間、ふっと意識が遠のいていく。

はた、と気づけば、あなたがたは自室で目を覚ます。

どうやら長い夢を見ていたようだ。

何か魂が抜けたような、しかし達成感に包まれているような……そんな奇妙な倦怠感がどっと押し寄せる。

あなたの部屋に窓はあるだろうか？

今、空はどんな色をしているのだろう。突き抜けるような青なのか、それとも星を抱えた紺碧なのか。もしくは燃えるような赤色なのだろうか。

どんな音がしているだろう。どんなにおいがするだろう。

あなたの生きる世界とは。

あの二人が生きる世界とはきっと違うのだろう。邪な神々やその眷属はいないかもしれない。目を疑うような奇跡も無いかもしれない。

それでも、きっとこの二つの世界には何の隔たりもないのだろう。

あなたたちが想い育んだあの世界があるように、きっとこの退屈でなんの変哲もない世界も、彼らが運んだ種が芽吹いた、祈りと望みで出来た世界かもしれないのだから。

あなたが思うたび、彼らが思うたび。

きっとこの神話はめぐりつづけるのだろう。

……賽の音は今日も止まない。

これはあなたがたのみが知る物語。

そしてこれは、あなたがたの物語。

■ あなたがたの物語

ここの描写における“あなた”は PL を指している。

▽エンド E : Earth /アース

この世界は探索者たちの手によって元通りに再構築された世界である。

しかしパラレルワールド扱いはしなくても良い。通常通りの継続探索者として使うことができる。何故なら、地球など何回も「シナリオ」によって知らない間に崩壊と再構築を繰り返しているのだから、この事象はなにひとつ特別なことではない。旧き神々はまたこの地球を守ろうとするし、邪な神々は相変わらず虎視眈々と目覚めの時を待っている。シアエガも再びデュンケルヒューゲルの丘に封じられていることだろう。

探索者達までも再構築されたのはプロビデンス内に保存された遺伝子の波形データがあったからだろう。ヴェルゼも同様の理由とみて良い。

ヴェルゼが ED で登場しなかった場合、彼もまた別のどこかに生まれ変わっているものの、記憶を保持していないため会いに来ることがないのかもしれない。

けれど、同じ星の元に在るならば、いつかまたどこかですれ違うことがあるだろう。その時は彼も記憶がないながらも、きっとどこか懐かしさを感じるあなたがたと友達になりたがるはずだ。この辺りの解釈は KPPL に一任する。

▽生還報酬

- ・クトゥルフ神話技能+10
- ・上記神話技能を取得した後、SAN 値を上限まで回復
- ・HO1：好きな芸術技能に+30 任意の知識系技能に+50
- ・HO2：好きな芸術技能に+30 任意の行動技能に+50

▽HO1

あなたは古物研究家だ。あなたの左目は目を疑うほど美しい青色をしているがそれ以上の価値はない。〈APP+1〉

特殊スキルのみ剥奪。そのほかの技能補正はそのまま残して良い。

プロビデンスは現在アノマリオール博物館に展示されている。

▽HO2

あなたは普通の人間だ。しかしあなたの歌には目を見張る美しさがある。

これを生業に生きていけば生涯困ることはないだろう。

特殊スキルのみ剥奪。そのほかの技能補正はそのまま残して良い。

▽PCの後遺症

「大いなる青き星 その化身」

探索者達は現支配者「大いなる青き星」の化身の1つ、つまりただの人間である。かつてこの地球を愛し、そしてこの地球そのものと一体になった神々から分かれた化身であり、その記憶までも保持している。

世界の再構築のあと神々となった自分たちから生まれ人間体となった探索者であり、つまるところシアエガの化身だとかグロースの幼体だとか、という身体そのものの特異性は打ち消される。

▽PLの後遺症

あなたがたは地球の外にある、我々が生きる世界とは異質な世界の鼓動を感じ取ることがある。きっとそこには我々と同じように知性を持った存在が居るのだろう。おそらく永遠に彼らと接触することはできないが、どこか絆のようなものを感じる。気が向いたときに、遠い遠い果ての宇宙の、邪な神々の住まう青い星に思いを馳せてほしい。

— 第四話「絢爛」 完 —